

3 もののけ、ようこそ——お茶の水橋

1

「これでどうですか、まだ痛みがありますか？」

私のようなずくの確かめてから、沢口さんは夜勤の看護師が処置していった点滴の針の位置を変え、血圧などの計測結果のデータ入力、薬剤の残量の確認、さらにブラインドの開閉の調整まで順に済ました。

仕事の運びは無駄がなく手際よいのに、なぜか一連の動きはゆったりした流れを感じさせる。数日たって気づいたのだが、その理由は沢口さんのおしゃべりにあった。

無駄口をきかず、すばやく、いかにも有能そうな様子で作業をするのではない。要領よく仕事を進めているながら、のんびりした口調で話しかけてくる。笑いにつきあったり、つきあわせ

たりするうちに作業が終わっている。

いつも病室から病室へ、小柄な身体を精力的に運んでいる人だった。あちこちの患者から頼りにされ、たびたび呼び出しの電話が鳴るのだが、それでいて「はい、どうなさいましたか？ そうですか、はい、わかりました。いま行きますので、お待ちくださいね」と答えながら、なおおしゃべりを続けたりする。

「……ですから、村上春樹はどうしても好きになれなくて。同僚の看護師たちは、みんな大の村上ファンですけど、私だけ違います。あの人の小説、どこがいいんですか？」

「好きじゃない？」

「ええ、だめです。男たちは、いじいじしてて、卑怯ひきようなやつばかり出てくるし。女もみんな、だらしがない。こんな男や女のどこがいいのって思っちゃいます。せめて凄味すごみのある魅力的な悪党でも出てくれば、まだましなのに。比喻も歯が浮くような、わざとらしいものばかりじゃないですか」

「なるほど、そんなふうに感じたんですか。だったら、しっかり読んだとも言えるわけだし、そこまで読んだのでしたら、楽しんだも同然でしょう。いまの感想に到るだけで、もう十分に愛読者ですよ」

私は質問を未消化のまま笑いながら応じたのだが、「そうですか……」と沢口さんはやはり納得しがたい。その納得できない表情には、患者とのリラククス目的のおしゃべりを越えて、

真剣な関心の気配が漂っている。

それなら、村上春樹の魅力をどう説明したらいいだろう？ 私は論議への誘いに活気づきそうになるが、自分は病気なんだと意気上がらぬ自覚に改めて引き戻され、にわか小声になって沢口さんを促した。

「ほかの患者さんと呼ばれているんでしょう？ 早く行ってあげないと」
「だいじょうぶです。すこし待っていたくほうがいい方なのです」

と沢口さんは何か事情がありそうなことを言い残して、病室を出ていった。

こんどは私のほうに、真剣な関心の小さな渦が巻く。待たせたほうがよい人間というものは、確かにいるのかもしれない。

たとえば、どのような？ 私は朦朧感もうろうかんの抜けない頭で考えを追おうとする。村上春樹の面白さを説明するよりも、「なにか事情がありそうなこと」に興味を覚える。せっかちで、わがままな患者の要求に、いちいち即応してはいけないという単純な事実の可能性が高いが、そのこと以上に、対人関係の応答のスピード感に関して、こういう場所に特有の事例があるのだろうか。すぐに求めに応じてはいけない人間がいるという配慮のレベルも含めて、ベテランの沢口さんは明らかに他の看護師とは異なる空気を漂わせている。しかし落ち着きはらった威厳といった重さの雰囲気は皆無で、むしろ小回りのきく機敏な軽さ、場合によっては、容易に他人に付け込まれそうな気弱さこそ感じさせる。

もちろん私は、沢口さんのプロフェッショナルな多くの配慮に助けられた患者であり、それは腸の働きが止まって深夜に苦しんでいるとき、「摘便」^{てきべん}（初めて知った言葉だが、肛門に指を入れて便を出す処置のこと）をしてくれた一事でも明らかだ。この技術は保育士が持っていて、ベビーベッドに寝かせた乳児に「摘便」をしていると、たちまち効果が出て、近づけていた顔に便を浴びるケースもよくあると聞いた。残念ながら、それでも私の腸は機能を休止したまま、四日も過ぎたのであったが。

高熱で苦しんでいた夜、その沢口さんが幽霊になった。

驚きの体験と言うべきなのだろうが、驚きの感覚というものは、ずいぶんと覚醒の境位に近いくところにある。朦朧状態では驚きは自覚できない。いや、たしかに幽霊だとは思ったけれど、より正確に言えば、沢口さんは幽霊の介添人だったのだ。

ドストエフスキーの『罪と罰』（江川卓訳）の第四部で妻の亡霊におびえるスヴィドリガイロフは、ラスコーリニコフを相手にこんなことを言っている。

幽霊なるものは、べつの世界のいわば切れ端、断片であって、そのはじまりである。したがって、健康な人間は、もちろん、それを見るべくもない。なぜなら健康な人間は最も地上的な人間だから、その充足と秩序のためにも、もっぱら地上の生活を生きなければならぬ。しかし、その人間がちょっとでも病気になる、人体組織のなかの正常な地上的秩

序がちよつとでも破れると、たちまちべつの世界の可能性が現われはじめる……。

判りやすい説明だ。「人体組織のなかの正常な地上的秩序」の失調によって、「べつの世界のいわば切れ端、断片」としての「幽霊」が出来しゅつたいするのであるから。私がわざわざこの文を引用したのは、この判りやすさによって、曖昧なるものの怖れに向けた〈悪魔祓い〉をするためではない。むしろ事態は逆で、「人体組織」の「地上的秩序」の崩れによって、「べつの世界の可能性」が立ち現われ、「幽霊」との遭遇を引き寄せたのだとしたら、たとえ病を機縁とするこ
とであろうとも、いささかの僥倖えいとうふを振り返るためなのである。

2

真夜中、と言っても何時であったか覚えていない。

いつも二時ころに、ドアが開き、懐中電灯の光が遠慮がちに壁を這って、点滴の目盛を照らし出したり、患者の寝息を確かめたりするのだが、たぶんそこまで遅い時間ではなかったと思う。

熱にうなされながら半睡半醒の時間を過ごしつつ、闇を見つめていた。すると、入口の方から部屋に薄明かりが流れてきて、また遠ざかり、そのまま消えるかと思っただが、白衣の姿のいつもの沢口さんが現われ、私の前を素通りし、無言で窓に近づいた。その近づき方が歩く

というよりも、腰の高さを一定にしたまま滑るような移動の仕方になり、そのことを伝えようとしたとたん、沢口さんはこちらに片手を上げて制してから、その手がロールカーテンの紐をつかんだ。

ゆっくりと引くにつれて、沢口さんの身体も吊り上がっていき、宙に浮いた。私は宙吊り状態が自分の身に起こったかのように胸苦しく、ふたたび声を上げようとした。しかし、口というより舌がこわばって発話できない。

カーテンが開いて現われたのは、東京スカイツリーの見えるいつもの窓ではなく、夜空を背景にした白っぽい広がり、スクリーンのようにも見えた。妙なことに、無言のままの沢口さんの姿をずっと追っているが、顔が確認できない。

それでも表情が気になって、ここらもち身体の向きを変えかけると、麻酔が切れかかっているせいか、腹から焼けつくような痛みが走った。ほとんど同時に、沢口さんの右手が手招きに似た動きで白い窓を示した。それに伴って窓が開き、冷たい夜の空気が部屋に流れてきた気もするが、一瞬後に起こった見知らぬ人物たちの顔の出没の怖ろしさで私は覚えていない。

最初に現れたのは、ムンクの「叫び」の人物が、はっきりと老女に入れ替わったような顔で、ぼろをまとい白髪の乱れ髪が揺れていた。ふさいだ耳を気遣って、私は自分の叫び声を抑え、身の震えに耐えた。

顔から目を離せざにいると(目を離すと何か決定的に怖ろしいことが起こるような気がして)、

顔がくるりと回転して消え去り、裏から新しい顔が現われた。それは表情はどことなく人間を感じさせるものの、毛に覆われた類人猿の顔で、おかしなことに前の「叫び」の老女よりも見覚えがある印象なのだ。しかし記憶を辿る間もなく消えてしまい、こんどは髷まげを結った力士を思わせる大きな顔貌が窓の隅から湧き出すような動きで現われ、吠えかかる口を作ったとたんに頭がつぶれ、晒さらし首の台に似た板に眼球だけが二つ残ってこちらを睨んだ。

ここでも私は目を背けるわけにいかず、視線を返すほかはなかつた。と、また顔が消えた。どうやら視線をしっかりと受け止めると顔の亡霊は消えるようだった。消えると新たな顔が現われる。薄く開けた口から白い歯が鋭利な刃物のように光る顔が、敏捷な身のこなしで挑んできそうなときも、目を凝視するとたちまち消えた。見つめ返すといなくなるが、見る限りはまた現われる。

窓が白い画布の広がりになって、顔の輪郭がない、目と鼻孔と薄い唇だけが浮かび、やや斜めからの視線がこちらに向かってきた。どうも若い女性の印象がある。しかもそれらが鼓動と同じリズムで点滅を続けていて、そのリズムを追うと私自身の心臓が苦しくなった。心臓に意識が行き、これはまずいと感じた瞬間、赤黒く爛ただれた心臓というよりも、レバーのような内臓に顔が貼りついて、目だけが動いている。

逃げなければ、と朦朧とした意識の中で思ったのだが、ここでも睨にらみ返すことが顔を追い払うただ一つの方法だと意外に冷静な判断があつて、眉間みげんに力を入れた。やはり、顔は回転しな

がらどこかに吸い込まれ、入れ替わりにこんどは山高帽を深々とかぶった顔が浮かび上がり、目も鼻も見えず、歪んだ口らしきものが動く。

「口らしきもの」と言うわけは、横長の黒っぽい染みの塊のように見えたからで、それが窓枠に向かつて左右に膨らみだした。が、途中でのたうちながら縮み、その反動で帽子の中から、横並びに鼻と目が引きずり下ろされた。苺みたいな形の鼻に続き、気弱な力のない眼差しが現われ、逆にそのせいかわりの柔和な凝視で、私は緊張が緩んで泣きたくなった。

本当に泣いた気もする。それも瞬時のことで、新たに眼鏡をかけた坊主頭の兇暴そうな顔が近づいてきて、私は必死で視線の圧力に耐えたのだ。

この止まることのない顔の出没の呪縛から逃れようと、沢口さんに助けを求めたのだが、姿が見えない。いついなくなつたのかも判らなかつた。

3

片目に眼帯をした蠶たてがみのある獐猛どうもうそうな中年男とか小さな顔に不釣り合いな太い首のまわりをマフラーのように腕をぐるぐる巻きにして目を剥いている女など、顔の氾濫はまだ続いたが、手術後の高熱から回復した後、書き留めておいたのはこれだけだ。あたかもスライドショーのように、さまざまな顔が浮かび上がってきては消えた。

怖ろしい幻妖げんようたちは何者だつたのか？

この胸苦しい遭遇は寿こしほぎというべき幻覚だったと気づいたのは、退院の日のことで、御茶の水でバスを降り、スーツケースを引きながら神田川の橋を渡ったときだった。それには、寺田寅彦という固有名ともう一つ不可解な出来事について語らなければならぬ。

病棟から北へおよそ徒歩二十分の場所に根津神社がある。私はそこへの道順を何度となく頭の中で辿っていた。いくつかルートがあるうち、必ずしも最短の道ではないが、旧岩崎邸庭園の脇の坂道を下りて不忍通りを左折し、千駄木に向かう道を進む。おそらく不忍池の水の気配を感じながら歩きたかったのだ。

なぜ根津神社をことさらに思い出していたのか判らない。ツツジの名所ではあるけれど、その季節に行ったのは一度だけ、しかも人ごみに息が詰まる感じで早々に退散した。

私が想い描いていたのは夜の根津神社だ。行くとすれば夜がよい。闇の中に浮かぶ楼門は記憶にあるようでもあるし、ないようでもあった。しかし病棟の電灯を消した部屋の窓から、街路灯の明かりも届かずに水面が暗く沈んでいる不忍池の風景を眺めていると、行かなければならないという理由のない切迫感にさいなまれそうになった。

たぶん、願いが叶ったと言うべきなのだろう。

点滴が外れた最初の日の夜、黒い人影の気配に、浅い眠りから目を覚ました。ベッドの足元の先にソフト帽をかぶった紳士が立っている。初対面だが、なじみの顔に思えたのはどうしてか。いや、「なじみ」と自覚的に判断したわけではない。ぼんやりと納得した気分があったの

だ。何しろ寺田寅彦その人だったのだから。

最初から当然のように寺田寅彦だと思つたのも妙なことだが、少なくとも私は「あなたは誰ですか」などと品のないことは訊ねなかつた。

声には出さないが、そつと一緒に来るようにと手招きしている。私はパジャマのままショートコートだけを着て、後に続いた。

深夜なのだが、救急搬送用のエレベーターは動いている。ただ、なぜか二階で止まつた。

寺田寅彦は迷ふことなく、青いランプのついた非常用の出口を抜けて、階段を降りて行つた。先を行く靴音が夜闇にひびくが、私の足はコンクリートをさするような音しか出さない。私のつかけているのは売店で買った入院患者用の白い室内履きなのだ。下から柔らかく吹き上げてくる風は、この季節にしては暖かい。

根津神社に着くまでの間、寺田寅彦と交わした会話はごく少ない。しかし気まずさとか居心地の悪さとかいった、委縮した自意識は全く感じなかつた。何かつかみがたい浮遊感のようなものが私を運んでいたので。

「きみ、柿の種は好きかね？」

「ええ、食べたいですね。でも、ピーナッツの入ってないほうが好みます」

実のところ、私は柿の種を食べたいなどと思つていなかった。寅彦に訊ねられた瞬間、発作的に食べたいと感じたにすぎない。しかし、だから、それがどうしたというのか、と私は思う

のだが、寅彦は何も言わない。かなりたつてから、「柿の種は、渋柿に限るよ」と呟いた。柿の種違いだ、と私はすぐに誤解に気づいたが、あえて訂正はしなかった。

道すがら、言葉を交わす機会はそれでおしまいかと思ったが、もう一回あった。最初、私のほうから話しかけたのだ。

「暗くてはつきり判らないのですが、今日は無地の鶯茶色のネクタイを締めていますか？ 石油ランプもそうですが、東京中を探して、やっと手に入れたのですよね」

寺田寅彦は相変わらず背中だけを見せたまま、何も応じようとはしない。そして今度も、やや時間がたつてから、誰に言うともなく口を開いた。

「震災の火事の焼け跡なんだが、鉛丹色のカビのようなものが、焦げた木の幹に生え始めて、しかもすごい速さで木という木に増殖していったんだ。その丹色が、散乱した煉瓦や電柱の赤さびにとっても映えていたのを思い出した。三、四日過ぎると草木に細い若葉が吹き出したが、その前に、あらゆる生命が焼き尽くされたと思っていた焦土で、命の芽吹き先の先駆者が、その赤カビだった」

たぶん近道なのだろう、不忍通りから、左の路地に入った。私の底の薄い室内履きが荒れた路面を踏んでいく。足裏がじかに凹凸を拾う違和感で、歩みが遅れがちになった。そんなことは意に介さず、寺田寅彦は先に進んでいく。追いつこうとすると足がもつれ、両手ばかりが大きく揺れ、暗い空気をかき混ぜる。